



1987年(昭和62年)
2月号(No. 500)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部150円

目次

昭和5年というトシを顧みる	吉沢一郎	(1)
500号に憶う		
織内信彦		(2)
会報500号を迎えて 座談会		(2)
マナスル登頂 30周年記念山行		(6)
海外の山		(7)
「アラスカの旅(上) 中村テル」		(7)
東西南北		(7)
「このカット」石井鶴三美術館を 訪ねて「老いて筋力を鍛える」 「笠取山山行」「第11回丹水会報告」		(10)
図書紹介		(10)
「托木小峰」「崑崙の秘境探検記」 「秋田の山歩き」		(11)
報告		(11)
総務委員会、婦懇・集会委員会、 北海道支部、山陰支部、 追悼 早川さんを偲んで		(12)
谷口現吉		(12)
会務報告など	総務委員会	(13~15)
図書受入報告	図書委員会	(13, 14)
お知らせ		(15)
総務委員会、図書委員会		

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

昭和五年というトシを顧みる

吉沢 一郎

もう会報「山」が五百号ですか。しかし創刊以来五十年以上経っているとしたら、本来なら六百号以上になっているべきだから、途中で二ヶ月或いは三ヶ月分を合併して出したことが何回かあるというのです。

まあそんなことはどうでもいい。「会報」が創刊されたのは昭和五年でその時の編集代表は浦松佐美太郎氏であった。私は昭和五年から九年頃までの足掛け五年ばかりの間、会社の関係で大阪、神戸、広島などに在任していたから、その間、会報の直接のお手伝いは出来ず、たまに小さな山行の記録や随想を出してもらっていたに過ぎない。佐美さんは一橋の三年先輩で、われわれの山岳部に入

ったこともあるが、いつの間にか消えてしまっていた。多分われわれのような頭の悪い連中を相手にするのを潔しとしなかったのかも知れない。事実彼は当時経済原論の大御所であった福田徳三博士の高弟であった。

彼との山行は霞沢岳、明神南壁から前穂への縦走、燕小屋の赤沼千尋氏らその他の穂高の南から北への縦走くらいのものであった。この時のお客さんは満鉄副総裁をやった一橋の大先輩江口定条老(当時六五歳)であった。

会報創刊の昭和五年という年は山に関連して私には思い出の割合が多い年である。私が書いた最初の山の本は同年三月古今書院から出した「登高記」(定価貳円貳拾銭)

で、序文はオクスフォード大学地理学教室で勉強中の田中薫さんに書いて戴いた。先生とは昭和二年の三月、大町からスキーで針ノ木越え、平ノ小屋、立山一ノ越、富山と、のんびりした山行をやったことがある。

また昭和五年の八月、私は東大谷の左股から早月尾根を経て剣へ登った。これは東大谷から剣を越した最初の記録となった。

そう言えば日本山岳会の「山日記」の創刊が矢張り昭和五年(六月十五日)である。五、六年前のこと、山岳会に第一号の保存がないというのを知って、個人的なことが大分書いてあり、汽車の三等切符まで貼つけてあってどうかと思ったが、遂に意を決して図書室に寄贈してしまった。色がちがいが部厚く形が少し細長いので直ぐわかる。大切にしておいてもらいたい。

次に私と関係のある昭和五年

は、故川崎吉蔵氏が創刊した「山と溪谷」のこと。草臥れた洋服と靴、薄汚れた四角い風呂敷包みを抱えて、当時芝の桜田本郷町の表通りにあった私の家の店(今の日石のあるところ)に入ってきた。『今度「山と溪谷」という山の雑誌を出すことになったので、吉沢さんも何か……』と言うのである。

全くの冒険だとは思ったが、私が大正十三年の正月に、弟の二郎と二人で秩父の雲取山を目指し、後白岩付近で道を失い、命拾いのピークをした時のことを書いて出しておいた。それが「山と溪谷」の創刊号にのった私の雲取山の話である。「オリオン」の梢に懸かる寒さ哉!これはあの時の実感であった。愛称「山溪」の創刊60周年は昭和六十五年であるからあと三年である。現在は通巻六一八号となっている。

お知らせ電話
234 六六五九

「山」の編集に携わったことがあるのである。それは昭和四十年(一九六五)六月の二四〇号から、昭和四十三年(一九六八)五月の二七五号まで、約三年の間に三回編集代表をやっていた。私の前は古沢肇氏、あとは山崎安治氏が引継いでいる。因みに私は六八年の九月にロンドンのUIA(国際山岳連盟)の総会に出席し、序でに地球一周の「山」の旅を行なっている。ちょうど五十日間であった。

私が最初に編集した二四〇号の劈頭に松方さんが、支部との連絡を密にするためにも、会報を早く月刊にしたいと書いておられる。いつから月刊が守られているかは調べればわかるが、最近では絶対厳守ということになっているらしい。

私達が編集していた一九六〇年代の後半でも、ヒマラヤ、カラコルム、ヒンズークシユはおろか、その他世界の各地に未踏の高峰や難峰或いは未探検の地域が数多く残されていたので、連絡を小まめにやれば面白い情報がいくつでも集まった。

この頃では未登峰や未探検、未着手のところが大分縮小されてしまっているが、横の関係さえ、特に社会人の山岳団体に属する人々との関係を一層広く密にすれば、

相当の成果があるものと思う。
日本山岳会はエリートが集まりだ
などとお高くとまっていたら、い
ろいろの点でドンドン置いてけぼ

五〇〇号に憶う

織内信彦

「山」が会報と言っていた時代
から数えて五〇〇号を迎える。創
刊が昭和五年十月だから数えて五
十七年たっている。よく続いたも
のだと言う言い方は適当でない
が、歴代の編集の任に当たった人達
の大変な苦勞と努力の結晶であ
る。私はここ二年ばかり、日本山
岳会の来たるべき百年史への資料
の覚え書きというほどの意味で、
「山岳」にそれらしいものを二回
書かされてきたが、そのなかで触
れたいと思いつながら、依頼され
たテーマの関係で、ついに言及で
きなかったことのひとつが、「会報」
と「山日記」のことであった。

「会報」が浦松佐美太郎氏の
提唱で発行されたのが昭和五年十
月、「山日記」が同じ年で「会報」
より四ヵ月前の六月に創刊されて
いるのは、今にして思うと驚くべ
きことと言わねばならない。この
両方とも、浦松、松方、藤島、角
田らの先輩が中心になり、その前
年のルーム設置に引き続き、同じ
年度内に、当時の日本山岳会とし
ては画期的な二つの新しい事業に

り食ってしまふことになるう。
要注意である。私は男女を問わず
若い人達の積極的な一層の活躍を
期待してやまない。(61・12・18記)

取り組もうとした意気込みたるや
正に壮ん、眼に浮ぶようだ。山岳
会が内容豊かな、今日の隆盛をみ
るに至るステップの年になったの
が、この昭和五年であったと言え
ると思う。しかも、その当時、
「山岳」は現在と同じ程度の頁数
でありながら、年に三冊も発行し
会員のもとへ正確に送り届けられ
ていた。最近「山岳」もパンク
チュアリーに出るようになった
が、何年前か、二年に一冊の合併
号などでお茶をにごし急場をしの
がねばならない危機があったこと
を考えると、随分よくなったもの
だと喜んでいい。

会報や山日記双方の編集業務に
たまたま携わったことがあるた
め、会報五〇〇号は私にとっても
人一倍感慨が深い。いまのように
委員会制でなく、まったく一人で
やったものである。若溪堂の坂本
さんに深夜の上野駅へゲラ刷りを
持ってきてもらい、満員のスキー
列車の中で校正をやったことや、
札幌に今はなき山崎雄雄さんや加
納一郎さんのお宅を原稿依頼のた

めお訪ねしたことなど忘れられぬ
思い出と言えよう。
会報の第一号には、発刊の辞と
いったような麗々しいものは何も
なく、ただ一言、浦松さんの手に
なると思われる次の一文が編集後
記としてさり気なく控えめに記さ
れているだけであつた。
「今後毎月此の会報を発行する
ことになりました。之を発行する
第一の主旨は、毎月の会務並に会
の情勢を会員に報告することにあ
ります。年に三回の山岳では兎角
疎遠になり勝ちな会と会員との連
絡を、此の毎月の会報で結んでゆ
く事が出来れば大成功でせう」

会報500号を迎えて

座談会

出席者 近藤信行(司会、会報編集委員長代行、図書委員長、書評
委員長、評議員) 松田雄一(常任評議員、元会報編集委員) 高本信
子(婦人懇談会、雑誌編集者) 江本嘉伸(会報編集委員、新聞記者)
岡沢祐吉(会報編集担当理事) 児玉茂(録音編集担当、元山岳編集
委員、事務局)

ところで、編集のテクニクと
いうか、たとえば、この数年ある
原稿の文章が、途中でどこへつな
がるのかわかりにくいような紙面
をたびたび見かけることがある。
私は、その道で飯を喰ってきたわ
けではないから、編集の専門家で
はないが、読者の立場になって読
み易いように、そして、どうすれば
きれいな紙面づくりができるか、
割りつけとかレイアウトには人知
れぬ工夫をしたものだ。それはと
も角として、毎月きちんと会報が
届くことは何より有難く嬉しいこ
とだ。担当者の方々の並々ならぬ
努力を心から誇りたいと思う。

近藤 今日では会報500号に当って皆
さんにお集りいただきました。様
々なご意見を出していただけたら
と思います。500号に至る歴史的な
経過について、編集に関する現
状、問題点、苦勞話などを出して
いただいて、さらに将来の会報の
あり方ということを進めてまいり
たいと思います。

——歴史的経過について——

松田 会報が発刊されたのは昭和
五年ということですが、この時代
にいわば山岳会の近代化が行なわ
れている。学生も活躍しだした第
二世代に当たっています。

近藤 丁度この時代になって明治
の登山者の代表作がまとまり、登
山文化史上の転換期を迎えてもい
ます。

松田 山岳会のルームができたリ
山日記が発行されたのもこのころ
ですね。

高本 初期のころから200号ころま
では読み物としても興味深いもの
が多いと思います。

江本 ちよっとひろい読みしても
山への情熱が感じられますね。

松田 皆一所懸命書いていたんで
しょうね。

江本 恵まれた人たちがやってい
るという感じもあります。

児玉 創刊当時のものから通して
ながめた感想は、内容が豊かな初
期に対して後半は特にここ十年く
らは分散的です。それは他に沢
山情報が入ったためだと思いま
す。

近藤 とにかく創刊当時は気分が
充実していた。編集者にイデーが
あった。良い原稿も集ってきた。
堂々たるジャーナリズムになって
いた。

岡沢 会報では一般的な山の情報
それに会員通信など会員情報の記
事が少ないと思いますが、最近で
は山岳専門誌を含むメディアが増
えたために会報の使命が昔ほど明
確でなくなっているかもしれない
んね。それでもきちつとまとめ、
継続してゆくことに意味があると
思います。

江本 会報の編集はそれぞれの編
集者によって違いがありますね。
岡沢 私のものは古沢さんのもの
に近いと思っていますが。

松田 古沢肇さんのは几帳面に割り付けが行なわれていて真面目な編集という感じがありましたね。

高本 「会報」から「山」と名称が変わったのはいつごろでしょう。

近藤 これもいくつかの段階があります。「山岳80年」で望月さんが書かれておりますが、戦後間もなくの頃「会報」とは別に「山」という雑誌が出ておりました。257号までの「会報」が258号(昭和四十一年十二月)から「山」と名称が変わっています。それは経費節減のため第三種郵便物の許可を得るの目的でした。しかし許可はなかなか下りず昭和四十九年八月に認可されました。

松田 戦中戦後の担当者の苦労は大へんなものだったと思います。伝統を守るためにいかに苦勞されたかが誌面から伝わってきます。近藤 戦後の会報ではマナスルの時期は一つの目標に向っていましたが、昭和三十年代はヒマラヤなど海外登山が花ひらく時期で、山崎安治さん、古沢さんが担当されていた。昭和四十年五月からの吉沢一郎さんはここにそれに熱心でいたね。時代と編集者の個性で成りたっているのですね。

江本 そういう意味では、確かに時代が変わった。でもそれにしても皆山登りが好きなんでしょう。それなのに最近の会報からは登山手の感性が伝わってこないですね。老人クラブ化したと言われても仕方ないですね。

方ないですね。

―編集に関する問題点―

岡沢 記事の中身から老人クラブ化しているように見えるかと思ひます。外国山岳会の会報などを見ますとフリークライミングだとかが伝統的、保守的組織のものの中にも最近では載っていたりします。こちらとしてもそういうものでも何でもとりあげる用意はあります。投稿がないのが残念です。

松田 日高信六郎元会長は会の最低義務は三つあって、それは名簿、会報、集会だと言われた。これらがスムーズなら会運営はうまく行っているわけです。会報の中身としては①会の記録はもれなく載せる②各会員への内外の情報、お知らせ、報告③自分の意見を発表する場で、投稿は歓迎する。編集に当る者は各方面に常に目を配っていないとだめですね。

近藤 会報は自分自身が参加するもので自発的原稿がなければ作れないと思ひます。各集会などの参加者は言われなくとも誰かが書くようであって欲しい。

江本 いつも不思議に思ふんですが、たとえばアメリカやポーランドの登山家を招待しても会報にきちっとその報告がされない。外交儀礼をやっているわけじゃないんでしょから。なぜ招いて、どんなことをして、何が残ったか、というくらいは会報にもしっかり記録すべきだと思いますが。

松田 記録のめりは相当に多いがこれは編集者だけの責任ではありません。編集者に担当者が協力する姿勢がなければならぬと思ひます。

江本 いまちょっと昭和九年の会報33号で藤島敏男さんの書かれたものに目を通したのですが、現在の問題とまったく変わりませんね。岡沢さんも同じ気持ちでしょうね。

岡沢 文字を一字一字数え、ソロバンで足し算、引き算、割り算、掛け算をやった割付け、といった編集の苦勞を知らない人に粗末に扱われると悲えます。

松田 たしか秩父宮殿下の「思い出の記」の図書紹介の記事に誤植があり、編集者が、ある長老会員からひどくお叱りを受けたことがありますね。

近藤 400号で山崎さんも書かれていましたね。

江本 発行日の問題ですが、なるべく早く原稿が載るようにして欲しいですね。マンスリーの意味が失われないうちにね。書いてから四十日もたつてようやく活字になる状態では困りますから。

岡沢 それは一所懸命書いてくれている人に申しわけないので、最近では再校の段階で新しいニュースを入れたりできるようにしています。

江本 もう一つ細かいことですが、会報に集会や山行への参加者を

をブラブラ書き並べる必要があるのか、もっと大きな情報があるのではないか、という点です。それに誰々さんにお世話になった、というふうな記述が多すぎる。

松田 不要なものも多いと思うが記録の意味で必要なものもけっこうあるので、一概に決めてしまうことはできないと思ひます。スペースの問題ということで言えば、「山岳」で会務報告を会報との重複になるということで抜いたことがあったが、やはり評判が悪くてまた復活したことがあります。

それから、会報を横組みにしたという話題も時々耳にしました。横組みに改めるのであれば500号というのは丁度よい区切りから。この点についてのご意見を伺いたしたいと思います。

岡沢 原稿用紙をタテに使う時など左から書かないのでしょうかねえ、手もよこれるし。(笑)

近藤 縦書きは日本古来の伝統ということでしようがないのでしょうかね。

岡沢 近ごろの会報が以前のものと違ってきたというのも時代の変化に対応しているのだと思ひます。「山岳」も記録だけでは成り立たなくなっているようです。今でも他には載っていないめづらしい

情報を知らせてくる人もおります。

高本 女性会員の活動も今はひところより低迷しています。日印合同登山のころは今よりずっと活発でしたから……。

近藤 会報にどんな情報を望みますか。

高本 私は最初に海外登山関係の記事を読んで、会員異動も良く見えます。ただ会報全体の印象としてはニュース性があまりないように思ひます。登山の情報は他からも得られますが、重要なものは載せて欲しいですね。内容がお花見山行的なもので占められて肝心なものが抜けていたりするし、それから若い人が書いていませんね。

松田 若がえりをはかるといふことは以前から言われていますね。

江本 かつして年齢的に若い人ということではなく、第一線の人とか、お年寄りでも内容が若いものが欲しいということですね。またこれだけの施設を持っている組織の会報としては、現在のように個人の手作りに頼るという編集方法は寂しい限りだと思ひます。原稿集めにしてもファックスを使うなどもっとシステム化できると思ひます。たとえば今活躍している日本ヒマラヤ協会などはずっと進んだ機能を持

山をきれいにグミは持ち帰ろう

っていると思います。今ヒマラヤの情報を知りたいと思えばJACではなく日本ヒマラヤ協会に聞くことになるでしょう。図書室はじめこれだけの施設があるのにそれが活用されていないのはおかしい。会報もその一つです。作っているのは岡沢さんでも会の会報です。機能を整備するということが考えねばならないでしょう。

—JACの中の会報の位置—
松田 これは会報のことから離れますが、この施設の有効活用という点では、向井ビル（昭和四十二年（四十八年）に情報提供をするということ、マスコミ関係からお金を集めたこともありましたが、ただ現実的には作業が大変なので、なかなか思うようにはできませんでしたが。今の世の中は、総て電算化の方向にありますからヤル気さえあれば英国山岳会がやりだしたような、ヒマラヤの登山情報をデータベース化して提供することだってできるし、是非やるべきだと思います。ただメンテナンスが大変なので、そのための人間が必要となりますが、そろそろ発想を転換してもよい時期でしょうね。

近藤 今重要な指摘があったので私の方からも実現できるかどうか解りませんが提案をしておきたいと思います。一つは会報の機能を変えてゆく、今まで担当の理事がかかこんでいたわけですが、時

代に対応させて事務局の中に会報の編集室を置くとか、会の中に専門職員を雇って会報の編集をして理事会と一緒に機能するとかが考えられます。

江本 これだけの拠点があるのに、一般の人は知らないでしょうが、会報の編集、校正作業などもっぱら岡沢さんが家でやったり、電話のない郷里の穂高町でやったりしている。（笑）機能ももちろんあるが、中核になる人で理事に對しても発言力のあるような人。そういうことが好きな人であれば仕事としては面白いはず。登山の世界はもっと刺激的だと思いますし。四二〇〇人も会員がいるのに登山というものの良さが伝わってこない。

近藤 ある時日本山岳会に對して批判の文が送られてきたことがありました。その時、理事だったか評議員だったかの方が「けしからん」と言っていた。それに対して私は反論を書いたらどうかと言いましたが、そうなればまた面白いとも思うのです。

松田 それがあげ足取りのようなものでなく、登山の本質論なら延々一年間ぐらい論争をやっても良いと思うのですがね。

近藤 歴史の長い会でですから様々なものがあるはずですが、何というか若者の意気が感じられないというところでしょうか。

松田 一般的に言って、種々ご意見

見を云う人は多いのですが、そういう人に限って、なかなか原稿を書いてくれないですね。人ごとのように思っているのでしょうかね。

江本 言えばやらされるという伝統がありますしね。（笑）読者の人の意見も聞いてみましたが、楽しみに読んでいる人も沢山いるようです。

松田 以前行なったアンケートの結果では非常に高い率で利用しているということでしたが、それに地方の人の情報源にはなっているようです。

江本 僕は批判の側から言うのですが時代を反映していないということ。

松田 若がえりをはかると言ってもどんどん高齢化してゆくという



61年12月19日 ルーム談話室にて
右から近藤、江本、高本、松田、岡沢、児玉

のには何か原因があるのでしょうか。江本 すぐく言いにくいことですが、若がえりと言っても年齢的な問題じゃない。山に行く、山を思う気持ちの若さみたいなものだと思います。今のJACの姿を見てみると、マネージメントにたけている人がひっぱり出されたり、あるいは使われているということなのではないですか。そういう人がいなければ会はもろこままるのですが、そして会にとって貢献度が高いわけですが、しかし少くとも彼ら全部が登山について深い思いを持っているかどうかは別なんです。どこの世界にも三十歳の老人がいますね。

近藤 会と行事との関連についてはどうですか。いろいろの委員会と一般の会員との間で色々な意見や研究なども出てくると思うのですが。

江本 委員会はいくつあるのですか。

松田 今二十一ですね。

江本 そんなにあるんですか？それじゃ全部の委員会が真剣にやりだし、それを全て会報におさめようとしたら大変なことになりま

近藤 委員会によってまめな所とそうでない所がありますがね。

近藤 編集には大変苦労があると

思うのですが、今後はどういう人にとのようによってもらいたいかということになります。人的構成の面ではどうですか。

岡沢 良い人がいればバトンタッチをしたいですが実際問題として非常に難しいと思います。ですからさきほどの事務局体制といううなものを作ったうえで、編集委員会が責任をもって協力するという形じゃないでしょうか。

松田 まず普通のサラリーマンではできないでしょうね。締切日に出張させられたりすることもあります。

江本 自分の責任じゃないのに他の人の責任も負わなくてはならないでしょうし。

岡沢 システムができれば、山岳会に事務局があるということであれば、今度は様々な情報も集めてくると思います。ドイツ山岳会を訪ねたことがあります。これは会報49号にも書きましたが、トニー・ヒーペラーが自分の家を編集局代りに開放してまして、そこにアップトゥデイトな資料が揃っているのにはおどろかされました。そういうふうなことも専門の人を置けばできることではない

高本 地方新聞などにも海外登山の記事が随分あります。JACには二十一もの支部があるのでそれから支部に担当者をお願い情報を集めたら面白いと思います。

ら。あと一つ近藤さんが書評委員会に關係されているので申しあげたいのですが、書評委員会の開催が年二回では少ないと思います……。近藤 おかしいと思います。僕は書評委員会はなくともよいと思います。いきさつは昭和四十八年ころに要望がありまして独立の委員会ができたのです。実際には会報委員会でも十分機能は果せます。短いものでもよいから早く出したいですね。地方出版のものとかにも良いのがあります。江本 会報の位置づけを理事会ななりでもう一度計って欲しいですね。というのは会報の内容決定の権限はどうも会報委員会の方にならないうで、JACCの機関月報という点です。責任という点で他の委員会とは格段に違うと思います。

児玉 別格という意味で言えば「山岳」もそうだと思いますし、図書館でも図書委員とは別の事務的仕事はありますから。松田 当初は担当理事を補佐するという目的でできた委員会だったのですが、次第に性格が変わって堅苦しくなってきましたね。江本 運用面からも、また今の時代が要求しているものからも、うまく機能していないのではないかなと思います。

松田 委員会の性格をもっと明確にして事務的なことと性格的なことと

とを分ける必要があるでしょうね。会員サービスが基本にはあるのですが、実務的には何もやらなくてもすむ所と、「会報」や「山岳」のように、どうしても追い込まれる所があります。図書もどんな本が増えてゆくから、それに対処しなければなりませんから同様です。だから何もやらなくてよい委員会はいらないでしょうね。私は前から委員会の行革をやるべきではないかと言っていました、そろそろ統廃合を考えるべきだと思います。今出た問題点を処理する前向きな委員会も必要ですね。

江本 僕は80周年の行事なんかもお祭りよりもそういうことをやるべきだったと思っていますがね。近藤 そろそろしめくりということで今後の方向を具体的に話して下さい。

岡沢 私ができるのはせいぜいあと二年です。さきほどの事務局体制を確立するというのを理事会でお願いするという形しかないと思いますね。

江本 都心にこれだけの施設があるというだけで、できるだけ早くもつと機能を発揮させるようにもってゆくことでしよう。適当な良いいセンスの人があれば良いですが……。

岡沢 江本さんは片山さん（故片山全平氏。「海外の山」前執筆者）に替ってやっていただいているわ

けですが、良い人が見つかった
思います。だからそういった人
ちがつぶれてもらってはこまるわ
けですよ。

江本 僕自身でいえば編集担当者
にこそ申しわけないと思っていま
すよ。ですからそういう人が長持
ちするということではなければなり
ませんね。

近藤 理事会の機能のなかで、例
えば会報を事務局の中におくとか、
専門職を「山岳」や図書も含め
て置くとかが考えられます。そ
ういった情報、出版活動の部門を
作るということを前向きに考えた
ら良いと思います。

江本 具体的にもう一つ言います
と、岡沢さんがやられている今、
その方向へと具体的に移行して欲
しいですね。

高本 オーバーラップさせるとい
うことでですね。

江本 そうそう、二年後にいきなり
やるということではなく今からや
って欲しいということです。(ア)

〔編者注〕

①本座談会を読まれた読後感、建
設的な意見等の投稿、特に今まで
寄稿したことのない人のを歓迎し
ます。誌上参加の形でご協力をお
願い致します。題して『山』を
よくするためには、

②歴代編集(代表)者氏名を参考
のために掲載しておきます。

1/11号 浦松佐美太郎 (作成者 児玉)

466号	456号	408号	360号	358号	341号	335号	324号	296号	288号	278号	276号	240号	210号	181号	162号	156号	151号	137号	133号	120号	119号	110号	101号	94号	85号	75号	70号	69号	63号	53号	37号	32号	25号	22号	12号
465号	455号	407号	359号	357号	340号	334号	323号	285号	287号	277号	275号	239号	209号	180号	161号	155号	150号	136号	132号	118号	109号	100号	93号	84号	74号	31号	24号	21号	18号	15号	12号	9号	6号	3号	1号
岡沢祐吉	皆川完一	岡沢祐吉	大森久雄	山崎安治・小倉厚	山崎安治・小倉厚	春田俊郎	坂下心一	山崎安治	山崎安治・松田雄一	山崎安治	小方全弘・山崎安治	吉沢一郎	古沢肇	山崎安治	渡辺公平	織内信彦	望月達夫	不詳	塚本繁松	塚本・田辺主計	塚本繁松	塚本・吉阪隆正	望月達夫・塚本繁松	石原 巖	吉沢一郎	角田吉夫	中司・角田吉夫	中屋建式・中司文夫	逸見・松方三郎	額田・逸見真雄	額田・福島昌夫	額田・額田	額田 敏	角田吉夫	

マナスル登頂三十周年記念山行

マナスル登頂三十周年記念トレッキングは初登攀者の今西寿雄JAC会長を団長として、総勢二十三名がネパール入りした。その中、A班、十四名が三十年前の大キャラバンが十八日間、苦心して歩いたコースを、ほぼ忠実にたどるように、大型ヘリコプターでわずか一時半ほどで、サマ部落へ入る。三十年間のズレは、四百人の人夫の大部隊が歩いたブリガンダキも、丸いヘリの窓の下に切り立った崖も、アツと言う間の通過でしかない。

八一五六のマナスルの特徴的な尖峰が右に、これと向き合う形で、今にも崩れそうな岩壁を見せるパンブーチン、前にはヒマルチュエリの左右の尖峰、後方はラルキヤ・ヒマールの中国国境の山々。三四五〇のサマガオン部落の上部にあるサマゴンパの盆地は、周囲を八千の山々に囲まれた、まさに、別天地である。五歳くらいの小さな子供も、草刈りのカマを腰に挟んでいる。今の彼等の毎日の仕事は、遠く離れた山腹への冬用燃料集めが課せられた任務である。朝八時頃に大きな籠を背負って、夕方四時頃にマキを一杯つめて村に帰ってくる。手近には、日本女子隊が前進キャンプを建設した、マナスルの東稜の末端尾根

が手ごろのマキ場らしい。三十年前と比較して森林は増えている、と今西会長は視察している。翌日、翌々日、BCと女子隊のC1キャンプ地までの軽いトレッキングをしたが、途中、かなりの巨木が残っており、雑木は行手をばむくらいの繁りようである。大自然と、サマの人間との相関性は充分に保たれている、と見ても良いであろう。自由に外国人が入れないのも、自然が保たれている最大の理由と考えられる。

夜半、テントの外に誰かいる気配に出てみると、白い息を出してヤクが枯草をたべる姿が月の光に青黒く映る。空気が乾燥して気温が低いので糞のおいがでない。下界では不潔さに顔をしかめる牛糞も、黒い石コロくらいにしか思えない。ましてや、落ちたばかりの湯気の立っているのを、左手で無造作に掴んで、背負った籠に放りこむ村民の燃料集めを見ると、不潔と言う考えは浮んでこない。人間と動物の、自然に順応したひと駒である。

サマゴンパの盆地は四周を高い山々に囲まれているので、無風の時はフェーン現象を起して、強烈な紫外線がふりそそぐ。ポカポカ暖かい日中の陽差しは眠気を誘う。枯れた芝草の上にシユラフを

千し、指を突込めば青々と染まっ
てしまうと思われくらゐのヒマ
ラヤの虚空に、三百羽ほどの山鳩
の群れが、時計廻りに大きな螺旋
を描きながら、上昇気流をうまく
掴んで、高く高く舞い上って行
く。静かなサマゴンパの枯草の上
の、まどろむ瞳に、山鳩の一団が
マナスルのナイケ山の左端のゴル
を越して、マルシャンデーの谷へ
渡って行った。(山本朋三郎)

三十年前という私も未だ三十
代で、日本山岳会には入っていな
かったが、日本人が初めて八〇〇
〇峰に立ち、しかも世界初登頂
という歴史的な記録を作ったマナ
スルは、強く印象的な一つの事件
であった。

後に毎日新聞社から公式報告や
写真集が出て、むさぼるように
読んだものだが、今では女性隊も
登り、バリエーションルートも
登られて、ややポピュラーな山と
なってしまったが、ヒマラヤの
八〇〇〇峰ともなれば、やはり
巨大な経費とエネルギーを要する
ことで、遥かなる山という感じを
胸中から消し去ることはできな
い。

そのマナスルが、こんなにも近
く、語り合うような親しさをもつ
て、毎日眺められるとは、とても
信じられないことであった。そこ
は私たちが滞在したサマゴンパの
部落である。

映画「マナスルに立つ」の中
で、横有恒隊長が退屈そうにパイ
プをくゆらしているその前で、一
枚一枚四〇〇〇ルピーのお金を数
えているシーンは有名であるが、
あの時日本隊のマナスル登山を拒
否し、僧院修理費の寄付でやっと
不隠のサマを通じたというその
サマ部落も、私が歩いていると子
供が家の中から出て来て、「ナマ
ステ」とあいさつする。大人たち
の表情も明るく、何等不安感を抱
くことなくスケッチしながら時を
過ごした。私がスケッチしている
と子供たちが集って来て、何やら
ベチャベチャ話しているが、「こ
れはむずかしいな」というと、
子供たちも一斉に「これはむずか
しいな」という。「君は美人だ
ね」といって女の子の顔に触る
と、「君は美人だね」と声を揃
えて真似し一斉に笑う。「この山
は何という山だい」とナイケ山を
指さしながらたずねると、子供た
ちは「ニャーギヤー」という。
「猫みいだな」と私が笑うと、
やはり「猫みいだな」といっ
て笑い出す。

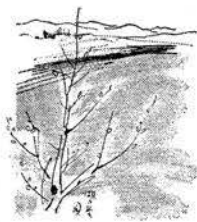
三十年前に、腰に蛮刀をたばさ
んで日本隊を囲み、神の祟りがあ
るからといって登山を拒んだ人た
ちは、今何人生き残っているだろ
うか。三十年の時の流れは、この
チベットに近い山奥に住む人々の
感情まで変えたのだろうか。そ
ういえば、三十年前のベースキャ
ンプを探すのに、随分と手間取っ
たものである。

初登頂者の今西さんでさえ「此
処」と決めかねるのに、初めてや
って来た者どもが、「此処だ、こ
こだ」と決めてかかるのもまた、
奇妙なものである。

山を降りてから、ブリガンダキ
溪谷を更に奥へさかのぼってサン
ドーという部落まで行った。村の
人々が広場で集会をやっていた
が、私が挨拶すると快く挨拶を返
してくれた。帰りは陽も山陰とな
って、薄暗くなった山の斜面が岳
樺の赤味を帯びた枝に色どられ、
ピンク色に染った稜線をつくって
いたが、その上に夕映えのマナ
スルが、ひととき高く頭を出してい
るのが美しかった。それは恰か
も、「いよいよお別れですね」とい
っているような感じで、思わずスケ
ッチの隅に「さらば、マナスル」
と書き入れた。

サマゴンパを離れる日は涙をこ
らえなければならなかった。チベ
ット語を勉強して、多くの人々と
交流した梅野さんは尚更だろう。
カトマンズに戻ってからは、毎
日のようにレセプションがあつた。
クマール・シャー殿下の流暢な
英語の挨拶。金子大使のユーモ
ラスな英語の話。山本さん(静岡
の)の日本語による大演説。それ
にしても河上さん(熊本)のハ
ツラツたる三本手はじめには、さ
すがのクマール殿下も、大きい目を

一層ギョロリとさせて驚いていた模様であった。
(神原忠夫)
東西南北



このカット

小野 幸

故・茨木猪之吉会員とおつきあいははじめたのは昭和十三年ごろ、私が会員になって、琴平の図書室でお会いしてからであった。

その頃の茨木さんは月に二、三度は山旅に出られ、山岳画協会の会計をいやいや引受けていたので、展覧会の売上金を会員にくばって歩かれたりしている以外には、家におられて子供さんの子守をされていた。

「土曜の午後からでも遊びに来いよ」にたびたび大井町のお宅へうかがいお話しをうかがうようになった。陽のあたるよい家であったが、家の中はゴチャゴチャ、足のふみ場もないちらかしようなのはおどろいた。四号の板の作品が百枚ぐらい何段にもつみ重ねられ、そのとなりには絵具やキャンパスがちらばっていた。

話しはいつも最近の山旅の出来ごと、昔、京都で絵の修行時代での浅井忠のことなどまったりの四方山話であった。私はトリンケンにはが手なので夕方前に失礼していた。

昭和十八年ごろ、私は同人誌を出すことになったので茨木さんにカットのかきかけでもあったら、いただけないでしょうか、とお聞きしたら、家へきて見なさいと云われた。うかがったら一枚の紙に数種のカットが描かれたのを見つけた、これでもいいかい、といわれた。

ところが同人誌は印刷所の関係で、お写印刷で作ることになった。せつかくの原画なので活版になるまで、保留させていただくことにきめた。その中、茨木さんは穂高で消えられ、同人もちりぢりになってしまった。

戦後その中のカット数点をJACの会報につかっていたのだいたが、このカットはスケッチ風なので鑑賞用に小さな額に入れておいたものである。この風景は長野大町郊外、仁科三湖の一つ中綱湖でのスケッチブックから写して、カットにされたとのこと。

石井鶴三

美術館を訪ねて

松田 雄一

秋晴れの日、信州上田市にあ

海外の山

アラスカの旅(上)

—AAC元副会長の推薦コース—

中村 テル

山に登れなくなる日はいつかはわが身にも来ると感じていても、実際に、こう早く来るとは考えられない私でした。そろり、そろりと独りで歩けば、まわりの人達の迷惑などは尻目にかけて、登れば登れない訳ではなさそうであるものの、昔のように、早く歩けないことは確かです。大抵の男性よりも早く、重いリュックサックで雪を押しのけて登ってから、いつのまにか六十年がすぎたのです。数年前にアンナブルナ内院まで行った者として最長老とか、エベレスト街道をベリチの近くまで、ポーター兼通訳の少年と二人旅でかなりの荷をかついで歩いた時も最長老婦人であったと言われて既に七年はすぎたようです。

いつも単独旅行の私が珍しく今度のアラスカ、カナダ旅行に友達二名を誘ったのは、セスナ機チャーター費を安くあげたい気持と、激しい登山ではないから、未経験者でも楽しめるし、年をとったJACの会員たちの新しいルートとして少しは参考になるかも知れないなどと、お節介な気持ちもあったからです。

最初はシヤトルからバンクーバーに行き、そこから船でキチカンを経てジュノーに到着し、船を乗りつぎヘインズから陸路をレンタカーでトックジャンクソンに入り、そしてセスナ機をチャーターしてセントエライス国立公園に入るのを目的としていた。ここは植村直己など日本人にも親しまれた、デナリ国立公園の二倍半はある広さで、四、五千級の山々にかこまれ、ランゲル氷河も公園内にあるので、山好きのわれら……と言つても古い山友達の田口夫人と私にとって、必ず満足すべき景色に違いないと考えたからだ。田口夫人は私より二年ばかり年長だが、仲々達者な登山家でもある。

詳しい旅程を去年来日された、アラスカのロッククライマーのリーダー、エンビック博士に問合せたところ、全然新しいルートを提言され、ホテル、バス、セスナ機等もいたれりつくせりの予約をし、費用概算もしらせてくれ、私共が行きやすいコースを作つて下さったのである。即ち、

アンカレッジ(一泊)。バスにてグレナリン(一泊)。セスナ機でセントエライス国立公園のただ一軒の宿である、マツカシーロッジに三泊。公園の中を歩き、ケニコット銅山あとなどを見て、その小屋所有のセスナ機で、ゴルドバー漁港に来る。ここに一、二泊し、セスナ機でヴァルディーズに来て、帰りはヴァルディーズより船旅をゆつくりたのしみ、プリンスウイリアム氷河や鯨、あざらしをながめてホイッテヤに渡り、そこから汽車でアンカレッジに戻る八日間から十日間の旅だった。

なにしろ八月になれば山では雪が降るから、なるべく七月中にとの彼からの忠告通り七月十日に往復二〇万円の割引切符を購入しアンカレッジに立出した。アンカレッジ空港には数回、交換登山でおめにかかった魚類学者のステーブ・デビス氏の出迎えをうけた。氏は主な通りを案内しながら、ホテルまで送つて下さる。

セントエライス国立公園
アラスカはアメリカの最後のフロンテヤと言われ、開拓精神にみちている場所でもあるが、同時にアメリカ人にとって新しい観光地として人気が出てくるようで、特に車で西海岸を北上し、シヤトルからバンクーバー経由のドライブをたのしみながらのアラスカ入りをする人が多い。しかし、デナリ国立公園の方が観光施設は整っていると見

る石井鶴三美術館を訪れる機会を得たので、この機会に同美術館の近況をお伝えしたい。

本会永年会員であった石井鶴三氏については、山岳第二十五年の表紙「群狼」や、山岳五十年・五十一年の表紙「岩と小鳥」を執筆され、昭和四十八年三月十七日に亡くなった後には、山岳第六十八年（一九七三）には、小野幸氏により「石井鶴三先生のこと」と題されて、詳しい追悼文が掲載されているが、この美術館のことにについてはあまり知られていない。

この美術館は、真田幸村で有名な上田城趾に隣接する上田市大手二一八二、旧上田市立図書館の古い建物が利用されている。上田駅から徒歩十分くらいの距離にあるので山行の帰りなどを利用されて、是非立ち寄られることをおすすめしたい。（開館時間十時～十六時、但し祝祭日の翌日、月曜、は休館、0268-24-9620）

先ずこの美術館が何故、生れ故郷でもない上田市にあるかについてふれておきたい。

山岳六十八号の一二三頁に、小野幸氏宛の書簡が紹介されているが、この中にも「八月一日から五日まで上田で彫塑講習ですが、私は白馬から長野を経て上田へまわり、六日まで勉強し、七日に帰りました。上田講習は今年（昭和三十一年）で四十回となり、小生講師として皆勤し、感深いものあり

（後略）」と記されている通り、大正十三年（一九二四）に上小教育会主催第一回彫塑講習会に講師として参加されて以来、昭和四十五年（一九七〇）まで実に半世紀にわたり、彫塑の勉強は、主体造形を追求することであり、人間修業である。やる以上は本格的でなければならぬ。」と終始一貫、講習生とともに制作され、指導に当たってきたという経緯がある。

昭和五十四年に「上田市制六十周年記念石井鶴三展・上田彫塑研究五十五年展」が開催された折、作品二六点をブロンズ化し、一部公開してきたが、これを永久保存し一般に公開し芸術文化の向上に資するために「石井鶴三美術館」の建設が決定された由である。いずれ本格的な美術館が建設されることになるが、それまでの間、旧市立図書館の建物を利用して、昭和六十年七月に開館されたものである。

展示品は上小教育会、上田市所蔵の彫塑四十四点（第五・第四二回院展に展示されたものを主体とし）を中心に、上小教育会所蔵の水彩画六、油絵十七点、素描三、東洋画四点が展覧されている。このうち油絵については、山を題材にしたものが殆んどで、春陽会展に展示された「雪鳥」「浅間遠望」や山岳画展に出品された「奇峰」「高山秋色」など印象にのこるものが多かった。

海外の山

えて、あまり東南部には来ない。したがって、セントエライス地区では日本人もあまり多くなく、マツカシローツジの前を通った日本人は数名いるが、泊ったのはわれわれ三名が初めてであるからか、主人公のネビスキー氏とその夫人は非常に親切で、手造りのおいしいパンやケーキでわれわれをもてなすだけでなく、日本人は何んな食べ物が好きか等と訊ねて、われわれの嗜好に向くメニューを用意してくれた。電気も電話もない昔ながらの山小屋で、一九一五年に毎日五〇〇トンの銅を運び出したケニコット銅山の発展と共に栄え、二十三年からこの銅山に移ぎにきた労働者のためのバーとも思われた古い建物が、今や登山家の憩の家として活用されているようである。

この公園にはアメリカ中の最高の二十の山のうち十七があり、五〇三六呎のブラックバーン山を初め四ヶ所の山々とアラスカの三番目に大きな氷原がある。国立公園の1/3は禁猟区であるので少し奥にゆけばデヤシープなどの珍しい動物も見られると言われるが、宿泊所はこのマツカシローツジ一軒であるので余程の山好きでないとここまでは足をのびさない。

ゴールドバー

アラスカはなにしろ大きくて、広い。われわれの感覚から言えば、われらの自動車は彼等の自動車であり、われらの自動車は彼等のセーナ機のようなものである。

マツカシローツジ所有のセーナ機で、素晴らしい山々を越え、カパーリバーを真下に氷河の上を飛び約一時間半でゴールドバーに到着する。清潔な建物の空港事務所にとび込んで、久々に水洗便所ですっきりとする。

ロッジの便所は外にあったが、白夜つづきで夜半でもライトなしで行ける。蚊にせめられ、脚のとても短い日本人ではうまくとどかない高い床に

穴があいていて、下は深い谷底のように怖ろしかった。

小屋の主人公自らが運転したセーナ機は、われわれの荷物も重かったのか予想以上にガソリンを消費して、彼は一寸困ったようであった。三人で相談の上、五〇ドルをチップとして渡したら、彼はニコニコして帰りのガソリン代が出たと、何度も礼を言った。

わずか二日間であったが、電気もない、水洗便所もないロッジの暮しは、山慣れた私であってもたのしくはなく、北海道の奥地とアラスカでは不便さも異質であるように思えた。

ゴールドバーは氷河に一番近い漁港であり、町のそばのエーク山には残雪が沢山あり、いつでも夏スキーができるように見えた。街には全部で二十軒くらいの店があり、主な通りはチエス街と湖水通りであるが、殆んど店がない空地のような通りにも一番街、二番街、三番街、四番街とニューヨーク並の名がついている。

ケニコット銅山の繁栄により一九〇八年頃からひらけて、当時建築されたそのまゝの家が現在も教会であったり事務所や個人の住宅に使われている。自動車もすくなく交通信号が全然ない。観光客のため町の商工会事務所に女性一名がおり、色々と説明をしてくれる。人口は二千五百人である。

幸せなことに翌朝、彼女が鮭が沢山いる川へ案内しようとして出て、ホテルへ迎えにくてくれた。町から十分ほどユーク湖の奥に車を走らせると、湖水につづく川の入江のような所に大きな鮭が無数に泳いでいた。手でも捕まえられるほど岸の近くまで泳いでいる。私共が夢中で写真をとっていると、彼女がうしろで、「熊だ、熊だ」と叫んだので、あわてて車の中に飛び込んだ。後の山裾から鮭をとり茶色の熊が現れたが、われわれの声で驚いて藪に入ってしまった。彼女に言わせると

専門の彫塑、油絵の他、挿絵の分野でも新境地を開き、相撲界においても、横綱審議委員や相撲博物館長を歴任、日本芸術院会員、東京芸大名誉教授と……多彩に活躍された先生が、立体感動の形象化を求めて生涯を貫きとおす背景にあったものは「山」であり、この美術館に、「山に学ぶ」と題してこの辺りの事情を説明された印象に残る文章がみられたので、これを紹介して終りにしたい。

「昔の行者は修行のために山へ登った。人間を離れて山にはいり、きびしい自然の中に心身を鍛えたのである。私たちが山に登りはじめたころは、行者ならずとも、行者の修行に近いものがあつて、よい勉強になり、またたいへん楽しくもあつた。私は造型美術に志していたので、その方面でも学ぶところが多かった。山岳そのものが、偉大な造型としてわれらを圧する。しっかりとなくてはだめだと自然がすわってくる。ものすごい岩壁、深い渓谷、奔流・激流・瀑布の壮観、森林の美、変換きわまりない雲霧のたえずまい、と学ぶところきわまりなく、全くうかうかしてはいられない……」

老いて筋力を鍛える

中沢 真二

私は九十歳の時、胆嚢炎の手術

のあと、腰掛けた姿勢で脚を水平に、足首に錘をかけ漸次大きくして六kgを六秒間保持することを毎日三・四回繰返して、一カ月半後にはゴルフ一廻り(約七km)をした。

一昨春秋、右の太股の肉離れを二十日に二回したので自分で考えて、足の平を地面につけて手を前の柱につけ、膝を四五度に傾け、太股を痛くしながら六秒間保持を繰返して目的を達したのみでなく、歩行が九十歳頃よりよるけ、杖を用いたのを止めた。

ゴルフの球が飛ばなくなった故、九十三歳の時スプリングを腕力で伸し、初め五kg弱であったのが三カ月後には一三・五kgと三倍になり、老人の筋力も鍛えらるゝと大さくなることを知り、球も二割も遠く飛ばすことが出来た。

去年十一月末、高さ二メートルの石の五重の塔を彫むため寒さに無理をして座骨神経痛になった。最近回復してゴルフ半廻り、塔の頭も彫み初めた。

〔編者注〕 本稿は、昨年六月二十六日に、平沢亀一郎氏が亡くなられて以降、本会の最長老会員となられた、中沢眞二氏(会員番号六二三番、永年会員。明治三十四年九月二十六日生。九十五歳)の原稿である。編集者より、長寿の秘訣を書いて欲しいとの依頼に応じて、特に執筆していただいたものである。

本会には、中沢氏の他次のように九十歳以上の会員がおられます。

海外の山 二歳熊であるとか。
ここは春には野鳥の天国といわれるほど、アラスカのあらゆる野鳥が果をつくりくるので、野

河本 清(95) 横 有恒(92)
辻 莊一(92) 伴野 清(91)
広瀬 潔(91) 中河与一(90)
片桐盛三助(90) 早川種三(90)
大島英明(90) 岩田新治(90)
この機会に更めて、長寿と健康を祈念してやみません。



笠取山山行

―三水会現地集會報告―

第一日の十一月八日は素晴らしい好天に恵まれ、輝くような金峰から飛竜に続く奥秩父の山波を見渡せる鶏冠山を往復するという付録もついて、山歴六十年の坂倉さんの率いるエーデルワイス・クラブ員との思い出の多い山行だった。想い出に残った二・三を報告いたします。

―岳人の約束―

笠取小屋の屋根が見えてきて、歩を速めていたら、その小屋の方

鳥観察ツアーなども組まれている。(次号へ続く)

海外の山

から出て来た人が、私達の隊列には気がつかないで右の方に折れて去りかけていた。
先頭の高田さんが大声で「センセー」と呼びかけ、ふり向かれたこの人が片岡先生だった。

一同は思わず「センセー」を連呼した。正しく感激の一瞬だった。先生は突然運輸省からの呼び出しのために、会議に出席し同行が出来なくなり、その会議終了後出て、夜遅く塩山に着き、ここに仮泊。翌九日早朝新地平に出て、広川谷添いに雁峠から笠取山頂へと、私達を追ったが見当らないので下山し、再度雁峠山荘から笠取小屋へと探したが誰もいない。天候も悪くなったので、中断したのかも知れない……と思って帰りかけたところ呼ばれて、この奇遇となった訳である。

潤葉樹林のここでは二分も違ったらこの出逢いはなく、失意の先生は只一人下山された訳である。
〔注〕 正午を過ぎたヤブ沢の頭で昼食という意見も出たが、エーデルワイス・クラブの一員が「小屋迄頭張ろう……」と音頭をとって、歩を速めたことが、減多になつた。山の出会いに繋がったのである。

きか、肌寒い小雨模様の急峻な頂上。更に無人の小屋二カ所をも探されて、この生きた教訓を全員の手元あたりに見せてくださった素晴らしい山行のひとつだった。
―深静峡ロッジのこと―
落葉樹の続く三窪高原の夕暮時に見上げるロッジの何と立派なこと……と思つて中に入つて更にビックリ。風呂といふ食堂といふ設備完璧。地元の観光協会でも、その存在すら知らない……というこのロッジ。われわれをもつてこの年の営業を翌春まで閉じる由。針葉樹林の芽ふく頃、是非再訪したいものである。

―鶏冠山のこと―

関東軍の折に、幾度も汗を流した山。乃木さんが苦戦をされた山。鶏冠山。奇しくも同じ名のこの山、遥かに遠い昔の事を連想したのは私だけだったろうとは思いますが、何かの繋がりがあるのではなからうか、調べてみたいものだ。
参加者 坂倉登喜子、片岡博、遠田栄・篤子、斉藤直信、高田真哉他七名。(遠田 栄)

第11回丹水会報告

去る十一月八日、丹水会11回例



会が丹沢・霧沢山の家で行なわれた。この静かな山里は、ちょうど紅葉のまつさかり。紅、黄、そして緑と、錦絵のような味わい深い色合いが、しみじみ心にしみてくる。毎回参加して感じることもだが、ここが都心からたいして離れていないことに、今さらながら驚かされる。この丹沢の自然が、ずっとこのまま残っていてほしいものだと思う。

山の家での例会では、丹水会通信、そして前回のゲスト、ハンス・シュトルテ先生のお話しの記録『丹沢夜話―番外編』が配られた。きれいに小冊子にまとめられ、読んでみると、先生の流暢な日本語、ウィットに豊んだお話し

今回のお話は、幾徳工業大学の鳥居亮先生。北アルプスの山小屋での自然エネルギーの活用の様子を、スライドを中心に話していただく。この春、この丹沢の塔ノ岳尊仏山荘に、太陽電池による無線公衆電話が設置されたが、それも鳥居先生のグループの尽力によるものである。風力発電用のプロペラが強風で折れてしまったエピソードなどをまじえて楽しく話してくださった。

続く宴会では、テーブルに並ぶビール・日本酒・焼酎・ワイン・老酒 etc. なにか『世界の酒くらべ』という感じである。久しぶりの顔ぶれに話しがはずんだ。翌朝は、押し出し沢を溯行する。秋の朝の空気がビーンとはり

つめ、身体がひきしまる。昨晩のお酒がスーッと身体からひいていくようだ。沢は思ったより荒れていて、意外に手こずる。ザイルを何回か使った。二俣で左俣をとろうとするが、続く三段の滝がどうも越えられそうにない。巻き道もくずれて流されている。結局、二俣の出合いで昼食にしてひき返すことに決定。

ここで恒例の名物である古谷氏のコーヒーの登場。沢の水でわかったコーヒー飲みたさに毎回参加している人もいるとか。下りは尾根を下る。あつという間に出会いに着き、そこで解散。ところが時間が早いせいか、どう



図書紹介

天山山脈

托木六峰

一九八六年夏
女子登攀クラブ

女子登攀クラブ隊(田部井淳子隊長)が一九八六年夏、天山山脈のトムール峰(七四三三・三三三)に挑んだ登山報告書。いつもながら素早い刊行で、まして外国人が初めて入った山域であったので資料性も高まっている。

登山の結果は残念ながら失敗に終わった。敗因はいくつか考えられるが、経費の都合で偵察隊を出せず唯一の情報是中国隊(七七年)の報告書によるところが多かった。しかし、中国側の初登頂から十年近くも経ち、ルートの場合も変わっており登山活動は難行。そのうえ、三度も雪崩に襲われもしたが装備の流失にとどまり、全員無事に生還できたのは幸運としかいいようがない。無線機の交信記録から

ら緊迫感が伝わってくる。今回は過去の同クラブの海外遠征とはちがいがシエルバも協力員も使わず、自分たちだけで精一杯登り、結果はどうあれみんなが満了した登山だった、と語っている。

一九八六年十二月発行、B5版、一七ページ、発行所・女子登攀クラブ(東京都新宿区荒木町三の二三の三〇三)(高本信子)

崑崙の秘境探検記

周 正著
田村達弥訳

一九八五年秋、中国新疆登山協会とアメリカ山岳会とは合同による崑崙山脈ウグ・ムズタグ(六九七三)の探検隊を組織、首尾よく初登頂に成功した。この隊はかなり大がかりなもので、たとえば、米側ではブッシュ副大統領を名誉委員長、ワシントン州知事を名誉隊長、副隊長にロバート・ベイツ、隊長にはニコラス・クリンチらのA・A・C会長経歴者が名を連ね、チョモロンマの西稜登攀に名を残すホーンバイン博士も第一線で活躍している。

本書の著者である周 正氏は中国人最初のソ連仕込みの岳人の一人で、一九六四年シシヤパンマ登

山隊に副隊長をつとめた山歴をもち、今回は中央政府(北京)代表として加わっている。

登山隊中国側の主力は新疆登山協会に所属する少数民族から選ばれており、学術班、報道、運転要員などを含めると、総勢四九名、八トン積みトラック「ペルリエ」「ランドクルーザー」「北京」等の車輛が十二台。総経費は日本円に換算して約五千万円、隊荷はガソリン等も含め約四〇トンとある。流行のアルパインスタイルからみればかなりの物量方式であるが、軽量ではやれない、地質、地形構造、動植物の生態、環境関係等の調査が行なわれ、単なるスポーツ、遊びとしてはない登山のとらえ方をしている点、多くの読者の共感を呼ぼう。著者周正氏も自ら珍らしい動物の生態を観察しその一部を記述している。

登山隊は、ウルムチからコルラ、チャルクリク、マンナイ鎮を経てアルトゥン山脈と東崑崙山脈とのあいだの荒涼とした地帯に難行を続ける。そこは野生動物の楽園さながら、オオカミ、チル、ノロバ、ヤク、ヤマリス、恐龍に似た未確認動物「水怪」、崖羊、オオヤマネコ、ヒグマ等、そして現地では大脚怪とよばれる「雪人」について

もまっすぐ帰る気がしない。だからとなく川原に降りて、また宴会。

風が吹くたび、カサカサ音をたてて落ち葉が降る。帽子の上に、かたわらのザックの上に、コップの酒の中にも落ちてくる。降りし

報告

高麗山での

懇親山行

毎年「年次晩餐会」の翌日に行なわれている懇親山行を本年は湖南の地、高麗山で行ないました。十二月七日日曜日の朝、東海道線平塚駅に集まってバスで花水迄行き、近くの高来神社の境内に集結して受付業務を終える頃にはほぼ十時近くになっていました。

コースはこの神社裏から直接高麗山への登りとなりますが、この山は湖南地方では珍しく、非常に多種類の植物が自生しているの有名な地区で、そのため神奈川県の特産品に指定されているのですが、緑濃い木立の中を気持ちよく登りつめ、続いて八俣山、浅間山へと眼下に美しい湘南海岸の白波を望みながら稜線を辿りました。

浅間山の山頂では静かな雑木の疎林の中に、われわれより一時間程先発して水や大鍋を担ぎ上げて昼の準備をしてくれていた総務や集会の委員が、味噌汁やお茶の仕

きる落ち葉の下で、心地よい疲労と酔いのぼんやりした頭の中に、「花風吹」という言葉があるけれど、落ち葉は何というのだろう」などと、たわいもないことがふと浮かんで消えた。

(三好まき子)

度をして出迎えてくれました。カサコソと鳴る落葉の上で冬の木洩れ日をあびながらワインを傾け、弁当をとるのは本当に楽しい一時でした。食後は神崎委員の軽快な司会で、遠く各地の支部から参加戴いた皆様の紹介や、また島田翼さんからは、それから行く湖南平にあるレリーフの主岡野金次郎さんの人となりについてのレクチャー等があり、最後には歌を唱って楽しみました。

其の後、浅間山山頂の一等三角点を訪ねて少しばかり三角測量の勉強をし、最後は湖南平(千畳敷)にある日本山岳会創立時の先人岡野金次郎氏のレリーフの前に全員集合して記念写真を撮り解散しました。そして夫々、三三五五と大磯駅へ降りました。

集合平塚駅 九・三〇、解散湖南平 一・四〇、参加者六十六名
(文責 総務委員・入澤郁夫)

昭和六十一年度忘年会

年次晩餐会の翌週、十二月十三日(土)に婦人懇談会・集会委員

も足跡を確かめ写真におさめていく。

図書紹介

目標のウルグ・ムズタグは十月二十一日、六一五〇のC3から零下三〇度の厳寒のなか、午後七時三十分中国側五人の隊員により初登頂された。しかし、登頂者五人共に高所登山は初めてであるのみならず、降路は夜間となり、どういうわけかわからないが、五人がバラバラに下降するという事態となる。やがて二人は滑落し、一人はルートを失いビバーク、あとの二人も辛うじて翌午前一時頃二人の滑落事故も知らずにC2にたどり着くのである。

いっぽう、登頂日の二日前、米国の登頂要員二人が、C3からBCに戻ってくる。理由は天候がよくないということ、「中国隊員は危険を冒すことができて、われわれは彼等と一緒に死のうとは思わない」。そんないきさつがあったにもかかわらず、登頂成功の知らせがBCへ届くと、彼らは中国人一人一人と固く抱き合い、喜びを表わしていたと著者は感動している。

会による忘年会がルームにて開催された。

この会は夏のビアパーティと対をなす、会員に大人気の催しで、年末の多忙中、この会を楽しみにしている会員も多い。

そして米国側隊員は遭難者救助のため毅然として第二次登頂を断念した。以上のような経過が、臨場感あふれる文章で活写されており、崑崙山脈に深い関心を寄せる筆者には殊に面白く読めた本であった。訳文も流麗で読み易く、また動植物名などには訳者の注記として、学名その他の参考事項が付記されている。

なお、ウルグ・ムズタグは崑崙山脈中第二位の高度であることが確かめられている。最高峰は一九八六年八月、筆者らの東京農大隊が初登頂に成功した七一六七峰であるが、両峰は直線距離にして約六〇キロメートルも離れており、同山脈がいかに長大なものかわかる。

昭和六十一年十一月刊、中公新書、一六六ページ、定価五〇〇円
(織内信彦)

秋田の山歩き

藤原優太郎編

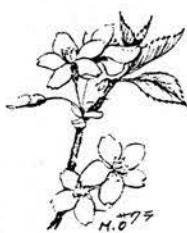
秋田県の山に登りたい者にとつて、たいへん便利なガイドブックである。さらにこの本が地元の人

岳会関係者(本会秋田支部会員も何人か執筆者のなかにみえる)の協力によって出来た本であることが、この本をいっそう価値あるものとしている。

作家、深田久弥の『日本百名山』に載らなかった山にも良い山のあることは、その山のあつて、地元の人々がいざばんよく知っている。日本歴史に登場せずとも、秋田県の歴史と深い関わりを持つ山もある。

コース、コースタイムを列記したような、どちらかというと無味乾燥にちかい欧米風のガイドブックは大手出版社が廉価で読者に提供してくれる。

一九八六年十一月十五日、無明舎出版(地方小出版流通センター扱)、定価一、二〇〇円
(岡沢祐吉)



図書紹介

合った。

日本酒、ウイスキーとグラスをかたむけるうち、今年の山の思い出や新年の計画やに宴も盛り上がり、恒例の抽選会が行なわれた。かきい小生が最高賞のヤ

ニツクセニール氏サイン入りザックを射止め、この会の報告を書くに至った次第である。

古い会員も若いメンバーも同じ山の仲間として分けへだてなく集っては談笑する、これが山岳会の良いところだろう。だから、集った皆さんの名は一人一人記さないが、参加者が七十名と盛会になるわけだ。

師走の一夜、夜の更けるまで山の話で賑った。

(追伸、当選のザックを背負ってさっそく、新春、太田理事のお世話で雪の鹿島槍を楽しんだ)

△出席者 七十一名
(絹川祥夫)

北海道支部忘年会

北海道支部忘年会は、十二月十三日(土)午後六時より、札幌駅前通り雪印パーラー地階『ゆき』で開催、橋本支部長始め二十六名出席で盛大に行なわれた。

先ず橋本支部長より開会挨拶、続いて永年会員の塩田輔雄さんの音頭で乾盃。京都、今西錦司元会長の千五百山登頂記念祝賀会と愛宕山、支部山行夕張岳、大沼池田園の親月会等の行事を振り返り、話が弾み会場は一段と盛り上がる。会員の一言メッセージに続き、支部長より、大雪スキー山行、渡辺兵力、橋本誠二スキー一騎討が提案され、多数の陪観希望があつた。

締め操りは、伊藤紀克永年会員の音頭で、次なる年も若々しく山と取り組む誓いをし、例によって二次会『つる』へ。

ホワイタイムミネーションに輝くサッポロでの、山岳会員の楽しい一夜であった。

出席者・順不同 石井忠雅、柳田涼子、阿部淳、井後幸太郎、兼平治水、朝比奈英三、大久保五郎、森下雅幸、新妻徹、石崎貞子、塩田輔雄、小林年、三浦勝幸、亀井秀子、佐々木喜一、金井五郎、及川敬一、高澤光雄、小野肇、赤石喜恵子、沼崎勝洋、安藤久男、水科行雄、橋本誠二、平野明、伊藤紀克
(平野明)

山陰支部晩餐会

山陰支部は恒例の晩餐会を十二月十三日(土)米子国際ホテルで会員二十一名を含む二十三名の出席で開催しました。

港山陰支部長の挨拶、井上事務局長の会務報告、各委員会の報告の後、ゲストとして迎えた東京農大中国崑崙山脈七一六七峰登山隊長の早坂敬一郎氏の講演に入りました。

早坂氏は東京農大山岳部創部六十周年記念に崑崙山の未踏の最高峰に登頂できたこと、それまで七千以上とされていたチオンムズターク山やムズターク山は六千以上に修正できたことなど学術的成果

追悼

早川さんを偲んで

旧き友よ 今も今も

旧き友よといふは
過ぎし日の旅山の思い出
赤林にさすしほのぼろり
峰に立ちし日を忘れず

山よ心のちゆ
はらみよ心くちゆ
変りゆくわが世
水ま交りへしけれ

永年会員の早川義郎さんが十月十七日、九十歳で亡くなられた。七月には慶応義塾のワグネリアンの一員として合唱のステージに立たれたほどのお元気で、山もずっと登り続けておられた。昨年は独りで会の山荘に数泊して晩秋の上高地を楽しんでおられる。傘寿を超えても足腰はお強くて私くらいの年輩のものは追隨に苦しむほどだった。

大正六年慶応山岳会の常念山脈縦走隊に参加され、元本会々長三田さんも一緒だった。爾来七十年のご交友で、三田さんの「わが登行」出版記念会(本会並に登高会有志共催)の際には軽妙な祝詞について、ご自作の「旧き友よ」の斉唱のタクトを振って会の終りを盛り上げて下さった。

早川さんは、高く、新しく、劇しく登ろうとする風ではなく、また後輩を進んで鍛えようとすることもなかったが、稀有な山登りの達人であられたと思う。

早川さんが山仲間と遺して下さったものは多岐に亘ってすくなくない。素晴らしい写真や奥様のために彫られた紅型染めの元型なども余技の域を超えられていたが、何と云ってもその中では、画と歌であろう。ご自身の風格がそのままにじみ出たような柔い掬す可き画風の淡彩画はその残された枚数の稀大さと、大正年間にもめされた日本橋界隈のスケッチの歴史的価値などと相俟って高く評価される可きものだろう。

更に私達の心に深く遺して下さったのは「山の唱」である。戦後間もなく山と溪谷社から山行歌曲集を出版されている。収められている一〇八曲の殆んどがご自身の訳詞、作詞、或は作曲になるもので、山に因む歌曲を唯集められただけのものではない。

その中の一つである「旧き友よ」は慶応山岳部創立二十周年を記念して作られたものだが、われわれはことある毎にこれを唱って、山と山仲間とその心とを、たしかめ合ってきた。華燭の日新郎と肩を組んで喜び唱い、戦時には壮行の駅頭で期せずして唱い、悲愁をこめて若い仲間の葬儀にも唱った。

そしてご自身の葬送の日、最後のお訣れを了えてから柩を囲んで、山仲間とワグネリアン達でこれを唱った。私はお訣れの悲しみを超えて、見ごとな天寿を了えられた早川さんのご生涯を思つて讚美と畏敬を新たにしたのであった。

(昭和六十一年十二月六日 山岳会年次晩餐会の夜、慶応山岳部十五年の後輩谷口現吉 これを誌す)

も上げられたことは幸いだったと話された後、多くのすばらしいスライドを用いての報告に入りました。長いキャラバン、苦しい氷塔地帯(セラックス帯)通過、「ホテル・コンロン」と名付けたアタックキャンプ、全員登頂の感激など、謙遜されながらも、充実した山行の様子を、エピソードをまじえながら一時間講演されました。

宴会に入り、久し振りに顔を合わせた会員の近況、山陰百名山候補の一つ猿政山山行、来年の夢など、話に花が咲き、三時間を短かく感じる晩餐会でした。(長田)

十二月理事会

12月6日午後1時

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚副会長、鳴原、橋本、松永、高遠、鈴木、太田、新井、大森、長谷川、平井、関塚各理事、松田、中村各評議員、委任 山田副会長、大橋、梅野各理事、山本監事、宮下評議員

審議事項 なし

報告事項

◎三合同登山関係 十二月一日、二日に北京で日中の会議がもたれた。近々三合同の会談が開催され、二月上旬には三合同で議定書調印を予定

◎委員会報告

◎マナスル30周年記念トレッキング

グ無事終了

◎「山岳」八十二年出来上る

◎「山岳」、会報「山」のバックナンバー処分について

◎望月名誉会員より、氏が所蔵の外国図書三六四冊寄贈の申し出あり、ありがたうお受けする。

ルーム日誌

12月

2日 婦人懇談会、総務委員会

3日 博物館を考える会

4日 学生会部

6日 理事会、支部長会議

8日 自然保護事務局会議

10日 集委忘年会

11日 図書委忘年会

13日 忘年会(婦懇、集会共催)

15日 フィルム委員会

16日 婦人懇談会、自然保護委

17日 三水会忘年会

18日 第一回三合同登山事務局

19日 員会議

20日 科学委員会忘年会、会報500

22日 青年懇談会忘年会

23日 図書委員会

26日 博物館を考える会

28日 三合同登山事務局委員会

12月来室者 47名

物故

立石紀雄 (6314)

村井米子 (3001)

12月13日

12月19日

12月19日

12月19日

12月19日

12月19日

12月19日

図書受入報告

図書委員会

昭和61年6月分受入図書(つづき)

17. Charles Clarke "Lightweight Expeditions to the Great Ranges" Alpine Club 1984 (購入)

7月分受入図書

1. 石田喜八著「詩集 山荘にて」昭和54(石田喜八氏寄贈)
2. 水野勉著「ヒマラヤ文献道 鹿鳴荘 1986(水野勉氏寄贈)
3. 橋本廣著「とやま 35 市町村の最高地点」北日本新聞社 昭和61(版元寄贈)
4. 島本恵也著「山岳文学序説」みすず書房 1986(島本恵也氏寄贈)
5. 高田勝著「コンチネンタルパーディング 北米大陸探鳥紀行」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
6. 甲斐崎圭著「山人たちの賦」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
7. 平本雅信著「登山入門シリーズ5 新しい山の食料」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
8. 荒川紀一著「日本の名峰 14 富士・御坂・丹沢」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
9. 小倉厚著「百山百譜」岳書房 昭和61(小倉厚氏・版元寄贈)
10. HAJ ナンガ・パルバット登山隊編「勇者よ永遠に」日本ヒマラヤ協会 1984(版元寄贈)
11. HAJ プータンヒマラヤ登山隊編「雷龍の国の白い頂」日本ヒマラヤ協会 昭和61(版元寄贈)
12. HAJ 日中婦人友好登山隊「地球の背骨の一角に立つ」日本ヒマラヤ協会 1986(版元寄贈)
13. 阿保喜代春著「心のみち ふるさとの匂い」阿保喜代春 1986(阿保喜代春氏寄贈)
14. 中島正文著「北アルプスの史的探究」桂書房 昭和61(版元寄贈)
15. 浅田晃彦著「世界無銭旅行者 矢島保治郎」筑摩書房 1986

(版元寄贈)

16. 貝塚爽平編「日本の自然 2 日本の山」岩波書店 1986(版元寄贈)
17. 山崎敬編「フィールド版日本の高山植物」平凡社 1985(山崎敬氏寄贈)
18. 望月達夫著「忘れぬ山の人びと」茗溪堂 1986(版元寄贈)

8月分受入図書

1. 中西俊明著「日本の名峰 16 北岳・甲斐駒・塩見」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
2. 酒井敏明著「ヒマラヤを越えた日本人 1~3」帝塚山大学 1986(酒井敏明氏寄贈)
3. 渡辺千昭著「日本の名峰 13 秩父・多摩・大菩薩」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
4. 橋本廣著「画文 加越山行譜」北国出版社 1986(橋本廣氏寄贈)
5. 北多摩郡山岳開発会編「山梨縣北巨摩郡山岳登山案内」北巨摩郡山岳開発会 1924(版元寄贈)
6. 東北大学山岳部・東北大学山の会編「東北大学日中友好西藏学術登山計画書」東北大学日中友好西藏学術調査実行委員会 1985(版元寄贈)
7. 江村真一編「日本山岳画協会創立 50 周年記念誌」日本山岳画協会 1986(版元寄贈)
8. 西丸震哉著「ニチャベッタ姫物語」中央公論社 1986(西丸震哉氏寄贈)

9月分受入図書

1. ラ・サール高校山岳部編「岳」ラ・サール高校山岳部(版元寄贈)
2. 小野庸著「放射線の窓から」日本プランニングセンター 1986(版元寄贈)
3. 山百合友の会編「山百合2号」山百合友の会 1985(編者寄贈)

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

4. 横浜山岳会編「チリン・7090」横浜山岳会 1986(編者寄贈)
5. 日本山岳会学生会部編「日本山岳会学生会部ボゴダ山登山隊1984年の報告」日本山岳会 1985(編者寄贈)
6. 信濃山岳会「日本アルプス登山要項」信濃山岳会事務所 1925(版元寄贈)
7. 加納一郎著「極地の探検」教育社 1986(版元寄贈)
8. 加納一郎著「フラム号漂流記」教育社 1986(版元寄贈)
9. 加納一郎著「北海道の山と雪」教育社 1986(版元寄贈)
10. 加納一郎著「自然のなかで」教育社 1986(版元寄贈)
11. 加納一郎著「世界最悪の旅」教育社 1986(版元寄贈)
12. 武田久吉著「日本地理大系別巻 富士山」改造社 1931(島田巽氏寄贈)
13. "Denali National Park" Adam Randolph Coll. (鈴木郭之氏寄贈)
14. 日中友好神戸大学西蔵学術登山隊編「クーラカンリ初登頂」神戸大学 1986(編者寄贈)
15. 日本山岳会編「會員名簿」日本山岳会 1936(今西寿雄氏寄贈)

10 月分受入図書

1. 東北大学山岳部・山の会編「東北大学日中友好西蔵学術登山報告書」東北大学 1986(編者寄贈)
2. 森茂明著「晴れて丹波の村人に」玄天書房 1986(森茂明氏寄贈)
3. 梓会編「梓会 70 年の略史」梓会 1986(編者寄贈)
4. 足利武三著「日本の名峰 28・霧島連峰と屋久島の山」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
5. 体育図書館協議会編「体育図書館協議会雑誌目録 和文編」体育図書館協議会 1984(版元寄贈)
6. 東京都立中央図書館編「緑縁機関名簿 1985 年版」都立中央図書館 1985(東京都寄贈)
7. 専修大学体育会山岳部編「群峰Ⅲ」専修大学体育会山岳部 1960(編者寄贈)
8. 同志社大学体育会山岳部編「DAC 報告 No. 16」同志社大学体育会山岳部 1956(編者寄贈)
9. 東京外国語大学山岳部編「CHALET No. 5・6」東京外国語大学山岳部 1961(編者寄贈)
10. 山徒倶楽部編「山徒倶楽部々報 176 号」山徒倶楽部 1956(編者寄贈)
11. 山とスキーの會編「山とスキー 1 号」山とスキーの會 1922(編者寄贈)
12. 「近代絵画にみる日本の山・名作展」朝日新聞社 1986(版元寄贈)
13. 小島島水著「小島島水全集 第 14 巻」大修館書店 1986

(版元寄贈)

14. 京都大学山岳部編「部報 No. 8」京都大学山岳部 1960(版元寄贈)
15. ウッディ・フォレスト著「ウッディ・フォレストの雨の山と林道歩きが好きだ」新宿書房 1986(版元寄贈)
16. 山口孝著「六〇年の成城スキー」山口孝 1986(山口孝氏寄贈)
17. 三木齋著「地名・人名・枕詞の意味」三木医院 1985(三木齋氏寄贈)
18. 清田清著「徳高・ヒマラヤ・北極」清田清 1986(清田清氏寄贈)

11 月分受入図書

1. 吉澤康暢著「日本の名峰 24 白山・奥美濃・伊吹」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
2. 伊藤乙次郎著「森と湖とケモノたち」白日社 昭和 61(版元寄贈)
3. 石井博編「もっと知りたいネパール」弘文堂 昭和 61(版元寄贈)
4. 須田栄一著「峻稜の四季 谷川点描」須田栄一 昭和 61(須田栄一氏寄贈)
5. 山の気象研究会編「山の気象研究会 ニュース No. 1~No. 50」山の気象研究会(編者寄贈)
6. 山の気象研究会編「山の気象研究会 ニュース No. 51~No. 72」山の気象研究会(編者寄贈)
7. 石川治郎著「丹沢回顧」日本山岳会・丹水会 1985(版元寄贈)
8. 宇山幸治著「丹沢回顧Ⅱ」日本山岳会・丹水会 1986(版元寄贈)
9. H・シュトルテ著「丹沢夜話」日本山岳会・丹水会 1986(版元寄贈)
10. 堀田弥一著「ヒマラヤ初登頂」筑摩書房 1986(版元寄贈)
11. 辻村太郎著「辻村太郎著作集 7 人と紀行」平凡社 1986(版元寄贈)
12. 山梨県「富士箱根伊豆国立公園」指定 50 周年記念事業実行委員会編「ふるさと山梨の新富嶽百景」山梨県々民生活局保全課 昭和 61(版元寄贈)
13. 岡田昇著「日本の名峰 1 利尻・知床・阿寒」山と溪谷社 1986(版元寄贈)
14. 江本嘉伸著「ルポ黄河源流行」読売新聞社 1986(江本嘉伸氏寄贈)
15. 日本ネパール協会編「シンポジウム・ネパール Vol. 13」日本ネパール協会 1984(編者寄贈)
16. 東洋大学体育会山岳部編「NUN 峰 7135 メートル」東洋大学インドヒマラヤ合宿 1986 年 1986(編者寄贈)

『山岳』および「会報」バックナンバーリスト

『山岳』覆刻版 1-1, 1-2, 1-3, 2-1, 2-2, 2-3,
3-1, 44-1 各七冊 定価販売
『山岳』 43-1 十冊、50年 十二冊、51年 五冊、
59年 五冊、61年、62年 各三冊、63年 五冊、
64年 百九十冊、65年 三十五冊、68年 二十九冊、
70年 二百二十四冊、73年 七十四冊、76年 百冊、
79年 百四十冊、80年 四十冊
「会報」 138, 146, 147, 149, 167, 170, 171, 175~178,
194, 195, 151-200目録, 207, 208, 213, 215~219,
221, 227, 230, 231, 235, 239, 243, 201-250目録,
250~256, 258, 259, 260 (一部), 261, 267~270,
272~275, 277~282, 286, 287, 290, 293~296,
298~300, 302, 307, 310~314, 322~329,
331~368, 370~396, 398, 351-400目録, 401~406,
411, 412, 417, 419, 421~428, 432~436, 438~441,
443, 444, 446, 447, 449, 450, 401-450目録, 453,
455, 457, 459, 460, 462~468, 470~497

◎山岳と会報

バックナンバー
の販売について

山岳会の書庫はこ存じ
のように現在ほぼ満杯に



☎ 234-6659

この電話で
お知らせ
しています

近い状態です。それは書庫の一部が倉庫として使われているのも原因の一つとされています。このままでは近い将来パンク状態になってしまいますので整理をすることになりました。倉庫の整理については各委員会の協力を仰ぎ、在庫の山岳、会報のバックナンバーを調べることに

ができました。総務では以下の要領にてバックナンバーをご希望の方にお頒け致します。なお三月三十一日の期限後は必要量を残して処分致します。

◎ご希望の号がありましたら三月三十一日までに、ハガキ(電話では受付けません)でお申し込み下さい。なお古い山岳は部数が限られておりますので、先着順と致します。

◎頒価は、山岳51年までは一冊二〇〇〇円、60年までは一冊一五〇〇円、61年以降70年までは一〇〇〇円、73年以降は定価どおりと致します。会報は55号以前は一部五〇〇円、56号以降は定価どおりと致します。いずれも送料は含みませんので、実費とします。

なお「山岳総索引」(COSTA)も期間中に限り五〇〇円です。
(総務担当理事)

◎第十五回山岳史懇談会

日時 三月二十八日(土)

午後三時から

場所 ルーム・集会所
講師 谷口現吉氏、金山淳二氏ほか。

昭和七、八年頃の慶応山岳部の活動を中心に、当時部員であった講師の方々に語っていただきます。
図書委員会

◎昭和六十一年度
新入会員の
オリエンテーション

日時 三月十四日(土)

午後二時より

終了後、五時より懇親会。
場所 本会ルーム
新入会員の諸兄姉は奮ってご参加下さい。
総務委員会

訂正 会報499号2ページ4段23行目の「戦後」は「戦前」に、10ページ2段17行目の二六点は二九点の誤りです。お詫びして訂正いたします。

あとがき 所用あり松本へ向かう。車中でこの会報の校正をする。いちじ右前方に見えた富士山がいつのまにか左側、塩嶺トンネルを抜けると乗鞍、穂高が光った。

昭和六十二年二月二十日発行

100 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座 東京三ノ四八二九番
東京都港区六本木三ノ一〇

印刷所 株式会社 技報堂